

村上勝彦・松本光太郎編 『中国雲南の開発と環境』

日本経済評論社, 2013年2月, ix+328p.

加 納 啓 良

本書は、1995年に東京経済大学「雲南研究会」として発足し、2004年10月からは同大学「雲南研究所」に改組されて2011年3月まで存続した組織の、全部で約7回の中国雲南省現地の訪問調査を交えた共同研究の成果をとりまとめたものである。編者の村上勝彦氏が序文で説明されているように、中国内陸部の南端に位置する雲南省は、海拔6,740メートルから76メートルまでの高低差の大きな地域から成り、気候的にも亜寒帯から亜熱帯までのバラエティをもつ。変化に富む地形と気候により、そこに棲息する生物も多様であるが、人間界においても人口の3分の2を占める多数派漢族の他に、ここでは25の少数民族が多様な暮らしを営んできた。雲南はまた、いわゆる照葉樹林文化を通じて東の日本列島と共通点をもつ一方、ベトナム、ラオス、ミャンマーと国境を接しタイとも近接し、「中国の雲南」であるとともに「東南アジアの雲南」でもある（本書 p.1）という性格をもつ。

全部で7章から成る本書の筆者たちの専攻分野は、文化人類学、植物生態学、環境法学、農業経済学、経済史学などこれも多様であり、したがって本書は学際的共同研究の成果のオムニバスとも言うべき内容になっている。また、そのうち中国を主たる研究対象とするのは、文化人類学専攻の2人だけ、と記されている。インドネシアを中心に東南アジアの経済史と農村経済を専攻してきた評者にとって中国研究はほとんど未知の分野であり、雲南に足を運んだ経験もない。そこで、もっぱら「東南アジアの雲南」という側面に着目して本書を読み、東南アジアを見慣れた者の視線で感想とコメントを記してみたい。以下、書評の作法として、まずは各章の内容を手短に紹介し、それぞれへの個別の感想を付記することから始めよう。

第1章「雲南省における開発政策のグリーン化の可能性—持続可能な社会に向けて—」（磯野弥生, p.13-66）。ここでは、ほぼ1990-2000年代の雲南省の開発政策を概観し、その環境に及ぼす負の影響の実態と地方行政当局の対応の歴史を振り返りながら、自然の再生と環境保全型社会のためのガバナンスについて検討が行われる。最初の「1. 雲南の開発政策」では、まず「経済的に立ち遅れた地域から脱出」するための開発を推進する政策から「貧困脱出」と自然環境保全を両立させる「緑色経済強省」政策への転換が、農業、非鉄金属工業、観光、交通網整備、電源開発の各分野について明らかにされる。次いで開発政策がもたらしたさまざまな環境破壊の問題を述べ、省都の昆明市における開発政策の内容が検討される。続く「2. 持続可能な社会に向けた政策」では、エネルギー、森林観光、都市計画、汚染対策の分野で

の取り組みが紹介され、昆明市郊外の滇池の汚染問題と再生政策が点検される。最後の「持続可能な社会へのガバナンスの構築に向けて」では、国・地方間のガバナンスを論じたうえで、情報公開、住民参加、苦情処理と裁判など、環境ガバナンスと利害関係者との対話の問題が検討されている。

評者にとって興味深かったのは、1990年代に「退耕還林」すなわち農耕を縮小して林地を回復する政策の一環としてゴム樹の栽培が広がったが「照葉樹林あるいは亜熱帯林の生態系の破壊や表土流出」の問題を派生させたこと、銅、亜鉛、錫などの鉱業開発が大気汚染、水質汚濁、「癌の村や多くの労働災害の発生」を導いたこと、大規模水力発電所建設により住民の生活と生態系の破壊の問題が発生したこと、などの指摘である。いずれも、東南アジアの各地ではほぼ同様の問題が起きているからである。

第2章「自然資源、少数民族およびNGO—森林資源管理から見た雲南省農村部開発の側面—」（手塚眞，p.67-97）。本章では、農村部の開発、とくに森林資源管理の直面する問題をめぐる政府・現地住民・NGOの対応とその相互関係が考察されている。まず「1. 雲南省の『農村』と『貧困』：森林と少数民族の世界」では、2009年の総人口4,236万人中、農村人口が67%を占めること、チベットに次ぎ全国で2番目に都市と農村の所得格差が大きく、国が指定する全国の貧困県592のうち、74県が雲南省に属すること、そして「農村」「貧困」地域は、同時に山岳部の「森林」と「少数民族」の世界でもあることが指摘される。「2. 雲南省のコミュニティ林業とNGO」では、フォード財団をはじめ46の国際NGO組織が雲南省で活動していること、しかし、コミュニティ林業（社区林業）をめぐる政府とNGOの理解には食い違いが見られることが説明される。「3. 雲南省の天然林保護および退耕還林とNGO」では、改革開放期以降、生産責任制を森林も含む非農地にまで拡大し、集団所有林を「自留山」および「責任山」として各農家に配分したが、投資・生産の拡大に結びつかず、むしろ森林の荒廃が進んだため、その対策として1990年代末から「天然林保護計画」と「退耕還林」のモデル活動が始められたこと、しかしそれは住民の森林使用権を補償なしに否定するなど、コミュニティがおこなってきた努力や投資を無にする要素をもったため、NGOの異議申し立てをも招いたこと、また伐採禁止の結果、かえって不法伐採された木材の外国からの輸入が増加するなど皮肉な結果を招いたことなどが指摘されたうえで、国の首都北京におけるCCICED（中国環境開発国際協力委員会）など国際的ネットワークの対応の動きが紹介される。

インドネシアのカリマンタンではかつて原木の日本への輸出が熱帯林破壊の元凶とされたが、その後原木の輸出禁止政策により国内に合板産業が育った。しかし、近年は不法伐採と原木のマレーシアを経由した密輸出が問題になっている。かつてとは違い、輸出先の多くは中国であると言われている。本章を読んで、それが中国国内の森林資源管理問題と連動していることが理解できた。

第3章「雲南におけるモータリゼーションの進展」(堺憲一, p.99-133)。ここでは、雲南省におけるモータリゼーションの進展状況を、その現状、クルマの販売と購入、インフラの整備状況という3点から、街頭での計測やアンケートを交えて調査・考察している。「1. 雲南省のクルマ事情」および「2. モータリゼーションの現状」では、中国の乗用車の生産が2002年から急増し2009年には世界一となるにつれ雲南でもモータリゼーションが急進展したが、それはなお「黎明期の特徴」を残しているとして、路上における各種乗物の通行状況を、農村、地方都市、主要都市の各レベルで1998-99年と2005年の二度にわたり実地調査した結果を提示する。次に「3. クルマの販売と購入」では、やはり二度の調査の結果にもとづき、自動車の販売システムの変化と購入者にとっての税・費用負担の軽減化を明らかにしたうえで、「4. インフラの整備状況」では、同じく2つの時期における道路事情の変化を記述している。

日系自動車企業による組織化が深く及んでいるインドネシアの自動車販売システムの状況は中国とはずいぶん違うが、道路の整備状況、往來する乗物の種類とその変化の様子などは雲南と共通するものが多く、興味深かった。とくに郊外の道路では街路灯が未整備で、虫除けを兼ね街路樹の幹の根元を石灰でマークして照明の代わりにしている、というのは、1990年代までのインドネシアと全く同じではほえましかった。

第4章「雲南省の観光開発と少数民族文化」(橋谷弘, p.135-171)は、雲南省の5大開発産業のひとつで、自然景観と少数民族文化を資源として地域GDPの7%を稼ぎ出す観光業につき、現地でのケーススタディによりながら、そのあり方について論じている。最初に提示されるのは少数民族の村自体をテーマパークにした事例で、熱帯雨林の保護と観察をテーマとして成功した「マンモー村熱帯雨林ハニ民族生態旅游区」、レストランや土産物店を売り物にしたのが裏目に出て失敗したハニ族のパーラー村、タイ族の文化を紹介する農村エコツアーリズムを追求した「西双版纳傣族園」の3つが紹介されている。次に、雲南省の各少数民族の文化を保存するために昆明市内に作られた「雲南民族村」、失敗に終わったシーサンパンナの「民族神話園」、商業的には成功したが興味本位の猟奇的演し物を伴うなど問題も多い「西双版纳原始森林公園」の3つを、「成功したテーマパークと失敗したテーマパーク」の事例として検討している。「外部からの眼」と題する3つ目の節では、本来小説中の架空の地名だったシャングリラ(香格里拉)を実在の土地だと仮構して新しい県名に採用しチベット文化紹介をテーマに観光開発を進めた中甸地方、民族文化とくに母系制を「女儿国」として売り物にしたルーゲー湖のモソ人村落、昆明市郊外に「民族文化」紹介をテーマのひとつとして開設された「滇池旅游度假区」の例を挙げてその問題点を指摘する。そして最後に以上を、商業的にも文化的にも成功した事例、商業的に失敗した事例、商業的には成功したが文化的には問題の多い事例、の3つに分けてその要因を分析している。

山地の少数民族文化を観光資源化する試みは東南アジア各国にもあり、雲南のケースとの

比較検討は、興味ある研究テーマになるかも知れないと感じた。

第5章「雲南のイスラム」(p.173-211)は、2010年に夭折された文化人類学者松本光太郎氏の既発表の2論文から構成されている。前半の「1. 回族は恐ろしいか? : 雲南における回族の問題の背後にあるもの」では、清代末期の杜文秀の反乱と文革期の「沙甸反革命事件」とその後の経過を追って「回族」に対する恐怖観念の成り立ちに迫り、雲南回族の現状にも説き及ぶ。後半の「2. 雲南省新平県における『彝回』について: 食習慣の変化とイスラム復興」では、ブタの禁食という食習慣などの変化とイスラム復興の現象が報告される。

本章を読んでいて強く印象づけられたのは、雲南回族の歴史が元代のイスラム教徒来住に由来すること、明代の大航海で知られジャワのスマランやマレー半島のマラッカなどに彼を祀る寺院が残る鄭和が昆明の回族出身だったこと、などである。また、雲南のイスラムには、東南アジアのイスラムにはない独特の用語があるのにも興味を感じた。たとえば「アホーン(聖職者)」(p.188)、「イスラム経学院」(p.194)は、いずれもイスラム教徒の多いインドネシアやマレーシアでは耳にしない用語である。その背景を知りたいと思った。

第6章「ある少数民族のオーラルヒストリー—原始共産社会から市場経済社会へ—」(村上勝彦, p.213-278)は、シーサンパンナに居住しかつては母系制社会のもとで焼畑耕作に従事していた極少の少数民族、チノー族の農民「白三」(仮名)を相手に、1943年の出生から新中国の成立を経て現在の市場経済社会にいたるまでのライフヒストリーを、20数年の長期にわたってヒアリングした記録の集成である。1956~61年に小学校で学んだときの思い出、人民公社での労働、1958年に上位5%の「高い階級」(富農)に区分されていたため文革の時期に辛酸をなめたこと、1974年に再調査が行われて富農ではなく中農に認定が変わったこと、1979年から郷鎮企業の主任兼会計に就任して暮らしが楽になったこと、1983年から生産責任制のもとで漢方薬の原料となる砂仁(しゃじん)の栽培で成功したこと、2002年の山崩れにより全村移転を余儀なくされたこと、などが綴られたあと、白三家の農林業経営の状況が、水田耕作、砂仁栽培、茶栽培、ゴム樹栽培(1980年代末以降)、家畜飼育と果物・穀物栽培などの項目ごとに検討される。最後に少数民族政策のモデルとされたチノー族社会全体の商品経済化過程、山林経営をめぐる「林権改革」、生態環境保全のために提唱された「シーサンパンナ・モデル」について記し、チノー族社会の将来についての白三の言葉を引用して結びとしている。

チノー族が経験したような焼畑農業から商品作物栽培への直接的移行は、かつてインドネシアのスマトラヤカリマンタンでも、主に住民ゴム栽培の拡大にともない(1910年代以降つい最近に至るまで)生じた現象で、類似点に興味を覚えた。ただ、本章で詳述されている白三家のゴム栽培の状況は、インドネシアやマレーシアのゴム栽培を見慣れた評者には、次のようにいささか驚くべきものである。第1は、ゴム樹の寿命についての認識である。白三によると「ゴムはいったん植えたら50年も収穫でき、家族の遠い将来のためにも役立つ」(p.

247)。東南アジアの常識では、ゴムからゴム液（ラテックス）が十分採取できるのは樹齢 25～30 年までであり、その後は植え替えが必要である。「家族の遠い将来」を考えるなら、およそ 100 年間収穫が可能な茶を植える方が賢明ではないか？あるいはこれは、元来熱帯雨林気候に適したパラゴムノキを温帯あるいはせいぜい亜熱帯気候の土地で無理に栽培しているために、生育が遅いせいだろうか？ 第 2 は、ゴム液（ラテックス）採取開始の時期についての認識である。やはり白三によると、「ゴムは植樹後、6～7 年後に樹液採取が可能」になる（p.248）。これも東南アジアでは植樹後 5 年目から採液を行うのが普通で、6～7 年後というのはありえない。やはりゴム樹の生育が遅いせいなのかも知れない。第 3 は、ゴム林の立地である。「白三家のように標高 900 m 以上のゴム林の場合…」（p.248）とあるが、インドネシア、マレーシアでは海拔 500 メートル以上の高地でゴムを栽培することはふつう考えられない。そこはもう、茶かコーヒーの栽培適地と見なされるのが普通である。かなり無理をして限界地で栽培を行っているのではないか、という印象をもつ。

このように無理な栽培でも利益が多いというのは、中国国内の天然ゴム需要が近年すさまじい勢いで拡大しているためではないか。近年中国の天然ゴムは増産の一途をたどっているが、輸入はそれ以上に急増し、今や断然世界一のゴム輸入大国である。これは、中国の自動車とタイヤの生産急増の結果に違いない。世界の天然ゴム生産量の約 8 割がタイヤ原料として使われるという事情は、過去 100 年間一貫して変化がないからだ。

最後の第 7 章「シーサンパンナの自然は天然か人工か—自然再生の可能性をさぐる—」（劉剛, p.279-320）は、タイ族居住地域のシーサンパンナにおける「天然の自然」から「人工的な自然」への変容にともなう、森林概念と森林被覆率、ゴム林拡大の推移を詳細に検討したうえで、自然再生の可能性とそのための政策的課題を分析している。この章で描かれている商品作物栽培の急増による天然林と先住民族の生活破壊の姿は、過去 40 年間にインドネシアのスマトラやカリマンタンで起き、今も進行していることと瓜二つで、非常に興味深く感じた。違うのは、雲南が温帯または亜熱帯に位置し、急増している作物がゴムであるのに対して、スマトラやカリマンタンで（そして隣のマレーシアでも）熱帯雨林破壊の元凶となったのは、1970 年代以降ゴムを押しつけて拡大してきたアブラヤシ（オイルパーム）の栽培だ、ということである。

東南アジアの天然ゴム栽培の中心地はかつて（イギリスが開発した）マレー半島であり、ついで（オランダが開発した）スマトラであった。今ではマレー半島のゴム栽培はアブラヤシに置き換わり、ゴムの主産地はタイに移った。そして現在は、ベトナム、ラオス、ミャンマー北部など、インドシナ半島北部でも生産が増えている。（そのすぐ北側が雲南である。）天然ゴム栽培のこの北方への拡大を誘発しているのは、中国の自動車産業発展である。アブラヤシ栽培の急増をもたらしているのも中国（とインド）の経済発展にともなう食用油需要急増である。つまり、中国の経済発展が東南アジアと中国国内の双方で森林破壊を引き起こ

《書 評》

す原動力になる，という皮肉な事態が生じている。こうした状況を考えると，本書のタイトルにもなっている「開発と環境」の問題をめぐる，中国と東南アジアのあいだにはかつて見られなかった強い連鎖関係が生じていることが分かる。そして両者を地理的にブリッジする位置にあるのが雲南省だ。その意味でも，雲南はたしかに「東南アジアの雲南」なのだ，ということに改めて感じ入りながら，本書を読み終えた。